

明治前期の和語系・漢語系オノマトペについて

——『浮雲』を中心に——

中 里 理 子*

(平成十一年十月二十九日受理)

要 旨

『浮雲』を中心に明治前期の作品を対象として、和語系・漢語系オノマトペの使用状況を概観し、両者の関係考えた。調査の結果から、和語系オノマトペで表現し得ない部分(その多くは心情表現に結びつく語)を、漢語系オノマトペで補ったこと、漢語系オノマトペの中でも既に広く用いられているものを中心に、言文一致文に取り入れようとしたのではないかとすることがわかれた。前者に関しては、和語系オノマトペにおいて、細かい意味を使い分ける働きをする型が未発達であること、オノマトペの種類自体がまだ少ないことが、その遠因となっており、和語系オノマトペが発達するまでの間、漢語系のもが使われたであろうことが考えられる。

KEY WORDS

和語系オノマトペ Onomatopoeia of Japanese Origin 漢語系オノマトペ Onomatopoeia of Chinese Origin
心情表現 Emotional Expression 言文一致 The Unification of Spoken and Written Language

はじめに

日本語のオノマトペ¹⁾には、和語系のもものと漢語系のもものとがある。たとえば、「シンとする」「ブラリと立ち寄る」は和語系のオノマトペだが、「ユウユウと立ち去る」「リンとした態度」の「ユウユウ」と「リン」とは、「悠々」「凜」という漢語系のオノマトペである。従来のオノマトペ研究は和語系オノマトペのみを扱い、漢語系オノマトペについて触れたもの、及び、両者の関係について触れたものはほとんど見られない²⁾。漢語系オノマトペは、古く

から「南には蒼海³⁾々々として岸打波も茫々たり(延慶本平家物語・卷十)」のように漢文脈の文章に使われるだけでなく、「言ヲ殘サデ申ケレ共、執事兄弟只⁴⁾々トシタル許ニテ、降參出家ノ儀ニ落伏シケレバ(太平記・卷二十九)」のように、和語に替えてもおかしくない文脈で使われる例があり、和語系オノマトペと同様に広く使われていたと推測される。本稿では、漢語を多く使用するようになった明治期前半におけるオノマトペの使用状況を検討し、明治前期に漢語系オノマトペがどのような意識で使われたのか、

近代の文章の中でどのように定着していくのかを考えていきたい。また、オノマトペという語彙に焦点を当てることで、明治期の言文一致文における語彙使用について考える手掛かりの一つをしたい。

1 漢語系オノマトペ

1・1 漢語系オノマトペの「オノマトペ」性

オノマトペは一般に以下のように定義される。

記号とする言語音と記号化の対象となる種々の事象（音響を明確に発するものから、何の音響も発しない状態のものまでさまざまであるが）との間に、ある種のつながり即ち音象徴（sound symbolism）が存在すると考えられる語の一群。

（『国語学大辞典』『擬声語・擬態語』の項）

言語音に「それらしさ」（記号内容とのつながり）を感じることがオノマトペを規定する重要な要因とすると、漢語系オノマトペは、漢字の持つ意味を連想させる点で、オノマトペとして認定すべきかどうか問題になろう。しかし、和語系オノマトペも、意味内容の連想という点では同じような問題を含んでいる。たとえば「うきうき」「ゆらゆら」「ひんやり」などの語は、それぞれ「浮く」「揺れる」「冷える」という一般語彙³を自然に連想させるもので、既成の語の意味との関連を感じさせて純粹に言語音のイメージだけにやらない点では、漢語と同様であろう。和語系に意味の連想が認められるとすれば、漢語系のを漢字と関連するという理由でオノマトペの枠から外すことはできない。

また、一方で先に挙げた漢語系の「リンとした態度」のように、

「凜」という漢字が容易に浮かばず「キリツ」と同じく言語音のイメージで使われたと考えられるものがある。これらは、「リン」と「サンサン」と「シンシン」と「モウモウ」と「ユウユウ」となど、和語系のオノマトペの型に合致するいくつかに限られるのかもしれないが、それらを含めて漢語系オノマトペ全体をオノマトペとして考える試みはされてよいのではないだろうか。漢語系オノマトペと並べて検討することで、和語系オノマトペの性質もより明らかになってくるのではないかと思われる。

1・2 漢語系オノマトペの型

漢語系オノマトペの認定は、『擬音語・擬態語辞典』（角川書店）の解説にある金田一春彦の分類に拠ることとする。

一 漢字一字のもの 例 燦（として）・寂（として）

二 漢字二字のもの

- | | |
|------------------------|---------------|
| (1) 「一焉」の形のもの | (2) 「一乎」の形のもの |
| (3) 「一爾」の形のもの | (4) 「一若」の形のもの |
| (5) 「一如」の形のもの | (6) 「一然」の形のもの |
| (7) 同じ語根を重ねたもの 例 當々 | |
| (8) 同じ子音の拍を重ねたもの 例 恍惚 | |
| (9) 同じ韻をもつ拍を重ねたもの 例 安閑 | |
| (10) 漢字三字のもの 例 欣々然 洋々乎 | |
| (11) 漢字四字のもの 例 意気揚々 | |

ここでは一、二(1)・(7)、(10)を中心に扱い、(8)(9)に該当すると思われるものを参考として拾い上げる。(11)は成句として用いられているので調査対象に入れない。以下、明治前期のオノマトペの使用状況を、言文一致文の代表的作品である『浮雲』を中心に見て

いく。『浮雲』のオノマトペについて考察した後、同じく言文一致作品及び言文一致文が出る以前の漢文訓読調・和文調を基調とする作品に見られるオノマトペ使用状況を合わせ見て、検討を加えることとする。また、簡単に江戸時代後期の作品のオノマトペも参照しながら、明治前期の和語系・漢語系のオノマトペの関係について考えていく。なお、和語系・漢語系の関係を考える際、特に明治期においては振り仮名の問題が関わってくる。できる限り初出に当たりながら見ていきたい。

2 『浮雲』の和語系・漢語系オノマトペ

2・1 和語系・漢語系の分類

玉村文郎氏が、『多情多恨』の漢字表記の考察に際して和語系オノマトペと漢字の関係を分類したものを参考に、意味(義)と音の関連に注目し、和語系・漢語系オノマトペをその表記方法から以下のように分類した。

〈和語系〉

A 仮名表記 例 スラリ ずるく

B 漢字を宛てる

1 漢語の意味を対応させる

a 漢語系オノマトペを宛てる

例 颯々(ざわく) 莞爾(にっこり)

b a 以外 例 落膽(がっかり) 偶(ふと)

2 漢字音を借りる

例 虚狼々(きよろく) 婆娑(ばさ)と

3 漢字の音・訓と意味を借りる

例 驚(ぎよつ)と 浮々(うかうか)⁸⁾

〈漢語系〉

C 漢字表記(振り仮名無し) 例 滔々 悄然

D 仮名表記 例 リウト

E 和語系オノマトペ以外の仮名を振る

例 肅然(しめやかに) 突如(いきなり)

この分類では、漢語系オノマトペに振り仮名をつけたものが、B1とEに分かれているが、B1の場合は、仮名書きで通じるはずのオノマトペの意味をより明らかにするために漢字を宛てたものと見做し、和語系オノマトペの方に使用意識があったと考えた。宛字と振り仮名の関係を見ると、振り仮名の方を主とする見方は他にも主張されている。⁹⁾

上記の分類に従って『浮雲』のオノマトペを整理したものを次ページの表1に示す。¹⁰⁾

表1 『浮雲』のオノマトペ
〈第一編〉

E	D	C	B				A
			3	2	b	a 1	
周章（あはて）て 全然（まるで） 全然（まるつきり） 躊躇（ためら）ッて2	リウと	焰々 嫣然 怏々 駭然 活潑 喟然 轟然 悄然 蒼然2 斷然 秩然 亭々皎々 滔々 蕩々 突然 咄々 縹緲 憤然 紛々 忙然2 玲瓏 激颯	篤（きつ）と 熟々（しげく） 匆々（そうそう） 匆々（そこそこ）に2 些と（ちと4・ちつと9） 些イと5 篤（とく）と 篤（とつ）り3 不圖（ふと） 10 吻（ほつ）と2 緩（ゆつく）り	婆娑（ばさ）と 薩張（さつぱり）	熱氣（やつき）5 落膽（がつかり）	淡々（あつさり） 落脱（がくかり） 儼然（きつ）と 駭然（ぎよつ）と 颯々（ざわく） 悄然（しよんぼり）2 慄然（ぞつと） 默然（だんまり） 徒然（つくねん） 莞然（につこ1・につこり3） 莞爾（につこ1・につこり2） 完然（につこり） 完爾（につこり） 嫣然（につこり）2 吃驚（びつくり）4 蕭然（ひつそ）と 慄然（ぶるく）3 茫然（ばんやり） 蹶然（むつく）と2 勃然（むつくり） 憤然（やつき）2	ア、4 ア、く6 アハくく2 アハ、アハ、アハ、2 あべこべ アンゴリ イザコザ ウー ウーイプー うかく ウトく うやもや うよくぞよく ウロく2 エへ、2 エへ、オホく オホ、2 ヲホく おぼろく ガヤく ガラく2 ガラリ3 ぎつくり キヤツキヤ ギヤツト グツト6 クヨく ゲツソリ ケロリ こせく ゴリく サツと ザワく シゲく シツ ジツト しぶく じやらくら しんなり ズート2 ズツト スラリと3 ずるく ズングリムツクリ ソツと2 そつくり そわく ちと6 チクく チツト4 チヤホヤ2 ちやらくら チヨイと7 チヨツ7 チヨツクラチヨイと チヨツクリチヨイと チヨツピリ2 チヨンボリ チロリ2 ツと ツイと ツカく ツン2 ドツド2 トパクサ どやぐや ト ント2 ニツコリ3 ネビツチヨ ヌツト3 ハキく バタく パタく ハツト2 パツと3 パツクリ パツタリ2 パツチリ2 ハラく ピツタリ ヒヨツト2 ピンと フト2 プスく フツと ブルく フ、ン フ、ン フム3 ヘイヘー2 ヘーく ヘタクタ2 ベチャクチャへ、へ、ヘン2 ホツト6 ポツト ポツタリ ミシリく ムクく2 ムシヤクシヤ2 ムズく ムツタリ めつきり もだくだ モヂく3 やわく ヨタク

〈第二編〉

E	C	B				A
		3	2	b	a 1	
宛然(さながら) 3 確乎(たしか)な 器々敷(げうげうしく) 周章(あはて)て 2 沈着(おちつ)く 3 突如(いきなり)	翼然 磊落 縷々 伶俐 輾々 忽然 2 索然 雜然 洒々落々 蕭條 断然 3 喋々 叮嚀 2 突兀 突然 2 判然 眇然 紛然 憤然 2 便々 翻翻 茫然 木然 猛烈 朦朧 默然(もくねん) 4 (もくぜん) 8 悠々	活々(いきいき) 阿容々々(おもえ) 2 早々(さつさ)と 澁々(しぶく) 匆々(そこ) 些と(ちと3・ちつと4) 篤(とく)と 不圖(ふと) 無残々々(むざん)	我他彼此(がたぴし) 2 愚頭々々(ぐづ) 無茶苦茶(むちやくちや)	決徹(さつぱり) 熱氣(やつき) 2	儼然(きつ)と 2 喲々(くどく) 悄々(すご) 全然(すつかり) 2 全然(すつぱり) 徐々(そろ) 2 徒然(つくねん) 周章狼狽(どぎまぎ) 2 莞爾々々(にこ) 2 笑爾々々(にこ) 2 莞爾(につこり) 4 莞然(につこり) 吃驚(びっくり) 5 喫驚(びっくり) 蕭然(ひっそ) 慄然(ふる) 3 憤々(ぷり) 憤々(ぶん) 落雪(ぼつとり) 佛然(むつ)と 蹶然(むつく)と 勃然(むつく)と 憤然(やつき) 3	アツ アハ、7 アハ、9 イサクサ いそく ウー 2 ウカと ウツと ウロく 2 ウンザリ エヘ オホ、19 ヲホ、オホ、ガブ 7 ガラリ 4 キツと 2 キツパリ 2 キヨロく 4 グズく グツと 5 グデンく クワツと グンニヤリ ゴンく サツト 6 さつさと さらく ジツト 5 シツクリ ジロリ ズイト ズート ズツト スツク スヤく そこく ソツト ぞろりと ソワく チト 2 ギツと チヤホヤ チヨイと 19 チヨツ 3 チヨツピリ ヂロく ギロリ 2 ギロリく ツート ツイと ツベコベ ツラリ ツンと ドタバタ ドツと 3 ドロく トンチンカン トント ニコく ニタく ニツコリ 2 ニヤリ 2 バタく バタく ハ、アハ、3 ハツト 6 ハツタ パツチリ ハツく ト バラく パラリ ヒソく ピツシヤリ ピツタリ 3 ピヨツコリ ヒヨツト 2 フト 19 フウ ブクく フツと 3 ブラく 3 ブルく フン 4 フム フン 3 ヘー 2 ベツタリ 3 ホツと 5 ホンノリ ムシヤクシヤ 3 ムツと 5 むらく 2 メツチヤラコ モヂく モヤクヤ ヤツサモツサ ワツく と

六

A	B	C	E
あ、あつと うと おつとおめく おろく がやく きやつく ぎよつと くすく 2 らつと ぐるり げたくくく ごしく こつそり2 こつてり さつくと さらり しッ しツかり しツくり しつとり じろり2 すごく すつと すつぱり すらり そつと そはく たんと ちと2 ちッと2 ちよいと5 ちよツくり ちらと ちらく ちろり ちゃんと ツと3 づかく つひと どつと とんと3 にやり のべんくらり はッと7 ぱッとはッ、はッ はッはッはッ2 は、、は、は、、はらく びしよびしよ ぴッしやり ぴッたり3 ひやり ひよッと ふと18 ふいと2 ふッと ふつつり ふん ふんへへへへ2 ベツたり ほ、2 は、、ほ、、ぼかんと まじく まじりく むちやくちや	恍惚(うつとり) 2 豁然(からり) 諄々(くどく) 悄然(しよんぱり) 悄々(すぐく) 徐々(そろく) 2 徒然(つくねん) 莞爾々々(にくく) 4 莞爾(につこり) 9 模糊(ばんやり) 悶々(むしやくしや) 憤然(やつき)	鬱々 愕然 軽忽 決然 忽然 続々 悵然 喋々 断然 突然6 判然 憤然 忙然 惘然 勃然 默念(もくねん) 優游 磊落	宛然(さながら) 2 開豁(はで) 3 周章(あはて)て 焦燥(ちれ)る 漸々(やうく) 倉皇(あはてて) 沈着(おちつ)いて 朴茂(じみ) 2 零々碎々(ちぎれく)
	b	浮々(うかく) 薄々(うすうす) 估(きつ)と 早々(さつさ)と 少(ちつ)と 突(つ)と 篤(とく)と	
	a	我他彼此(がたびし) 愚頭々々(ぐづく) 狐鼠々々(こそく) 薩張(さつぱり)	
	1	放心(うつかり) 澤山(たんと) 吃驚(びつくり) 葛藤(もだくだ)	

(Eは漢語系オノマトペの意識がないものとして省いた。下二段は、漢語系のもので和語系の仮名を振るもの(分類B1a)を漢語系に含めた場合である。(一)内は、和語系に対する割合である。少数第二位を四捨五入した。)

少数第二位を四捨五入した。）

		A + B	C + D	A + B B _{1a}	C + B B _{1a}
篇	異なり	136	26 (19・1%)	122	40 (32・8%)
一 延べ		270	30 (11・1%)	235	53 (22・9%)

篇	二		一	
	異なり	延べ	異なり	延べ
篇	125	299	72	115
	51 (40・8%)	82 (27・4%)	27 (37・5%)	36 (31・3%)
三	111	261	58	89
	63 (56・8%)	107 (41・0%)	30 (51・7%)	49 (55・5%)

半沢氏が論の中で述べるように、漢字よりは仮名文字使用をよしとした二葉亭が、「実際には『浮雲』において新旧・硬軟とりまぜて漢語を結構多く用いている」という事実を踏まえて、全体の漢語使用率が減少するのに反して漢語系オノマトペが増加することの意味を考えると、次の二点が推測される。一つは、和語系オノマトペだけでは表現し得ない部分を漢語系オノマトペで補ったこと(あるいは、漢語系オノマトペでしか表現できない部分があったこと)、もう一つは、俗語を多く取り入れようとした二葉亭が、漢語の中でもオノマトペに関しては使いやすい語として取り入れていこうとした可能性があることである。二点目については、一例だけだが漢語系オノマトペを仮名書きした「リウとして」の例があることも推測の助けになろう。これらは二葉亭だけに特徴的なことなのか、当時の漢語系オノマトペ使用に広く言えることなのか、周辺の作品を見ながら考えていく前に、『浮雲』の漢語系オノマトペと和語系との関わりについて、もう少し具体的に検討したい。

表1を見ると、『浮雲』では漢語系オノマトペに仮名を振る場合、一般語彙ではなく和語系オノマトペに対応させることが多い。Eの数はいくつか少ないが、漢語系オノマトペらしさを感じるものはほとんどなく、一般語彙としての意識で使われていたらしいと想像され

る。各分類の語を見比べると、AとB1a、B1aとCの語は、それぞれほとんど重なりが見られないことから、字句に神経を払った二葉亭が、和語系オノマトペ、漢語系オノマトペ、和語系の意味を漢語系で補ったもののそれぞれを使い分けていたと考えられる。漢語系のオノマトペと和語系をつなぐB1aと、漢語系のCについて、篇ごとに内容を見ていく。

第一篇でB1aとAが重ならないもの、すなわち仮名書きだけで使わずに必ず漢語系オノマトペに対応させるものを見ると、「落脱(がくかり)・儼然(ぎつ)と・駭然(ぎよつ)と・悄然(しよんぱり)・慄然(ぞつと)・默然(だんまり)・徒然(つくねん)・吃驚(びつくり)・茫然(ぼんやり)・蹶然(むつく)と」のような、心情を表す語および心情をうかがわせるような人物描写の語が大部分である。一方、Cの中でB1aと重ならないもの、すなわち仮名を振らずに漢語だけで使うものを見ると、物事の様相を表すものが多く、何らかの仮名が振られる「嫣然・駭然・憤然」(漢字が多少異なるが「忙然」も加えてよいと思われる)が、心情表現に結び付く語となっている。

第二篇のB1aとAが重ならないものの中で、心情表現・人物描写に関わるものは「喟々(くどく)・悄然(すこ)・徒然(つくねん)・周章狼狽(どぎまぎ)・慄然(ふる)・憤々(ぶり)・憤々(ぶん)・吃驚(びつくり)・喫驚(びつくり)・蹶然(むつく)と・勃然(むつく)と」があり、大半を占めている。Cで何らかの仮名が振られるのは「蹶然・憤然」の二語だが、これらは一篇でも仮名を振って使われていた。漢語だけで使われる語を見ると、「鬱々・嫣然・愕然・傲然」などの心情表現に関わるものが第一篇より多くなっている。第三篇も第二篇と同様の傾向が見られ、特にCは、心情表現の割合が高くなっている。

以上のことから、第一篇から第二篇、第三篇と進むにつれ、心情描写に漢語系オノマトペを多く使うようになったこと、そのほとんどが、仮名を振らずに漢語のままで使われたことがうかがわれる。また、第一篇の和語オノマトペと対応させたもの(Bl a)のうち、「黙然(だんまり)・茫然(ぼんやり)」は、二篇以降「黙然(もくぜん・もくねん)・茫然／忙然」という漢語で使われており、和語の「だんまり・ぼんやり」は使われないことから、二葉亭がこの語を漢語系の形のままで使うことを選んだのではないかと推察される。特に「もくねん」は、第三篇で「默念」の表記で使われており、「もくねん」という漢語系オノマトペに合わせて漢字を宛てたとも考えられる。これらのことは、二葉亭が「浮雲」の中で細かい心理描写をするに当たり、和語ではなく、漢語を積極的に選んでいったことを示しているのではないだろうか。書き進めるにつれ、心情表現をする和語の不足を感じた二葉亭は、漢語系オノマトペによって細かい心理表現を描き分けようとしたのではないかと思われるのである。例えば「につこり・にこにこ」という語は、伝統的に「莞爾」などの語を宛てて使われてきたが、「浮雲」では他に「莞然・嫣然・笑爾」などの語を宛て、意味の使い分けをしている。他にも、例えば「ぶるぶる」という語は仮名と漢字を宛てるものの二通りがあるが、仮名表記では「ブル」と頭を左右へ打振る(第一編)のように使われるのに対し、漢字の場合は「壁に寫つた影法師が慄然とばかり震へてゐる(第一編)」のように心情表現に関わり、使い分けの意識が見られる。

また、「愕然」という語は、例えば、『學問は出来ますか ト突然お勢が尋ねたので昇は愕然として』『學問：出来るといふ事も聞かんが：それとも出来るかしらん(第二篇)』『：勃然と跳起きて』『もしや本田に：ト言ひ懸けて敢て言ひ詰めず、宛然何歟搜

索でもするやうに、愕然として四邊を環視した(第二篇)」というように、現在のような強い驚きを意味するのではなく、思いがけないことにちよつと驚いた、はつと気がついた、程度の意味で用いられている。二葉亭にとっては、これに相当する適切な和語が思い当たらず、漢語で表現する方が適切であると考えたのだろう。これは、意味の問題に加えて、和語系オノマトペの型の未発達も関係するのではないかと思われる。例に挙げた「愕然」の後者の意味では、「びくつと」などでも表現できる場合があるが、「浮雲」を含めて当時の作品の中には、こういう型のオノマトペは出てこない。現在では、例えば「ふわ」という語基に対して「ふわ・ふわつ・ふわー・ふわふわ・ふんわり・ふーわり・ふわーり・ふわりん」などさまざまな型があるが、当時の作品をいくつか見ると、「○○つ・○○り・○○ーり」などの型は現れない。オノマトペの型は、意味の微妙な違いを表すことができる。和語系オノマトペでさまざまな型が未発達だったことも漢語系オノマトペを選ばざるを得なかった遠因ではないだろうか。

次に、二葉亭の漢語系オノマトペの使用状況と周辺の作品の使用状況とを対照し、明治前期の漢語系オノマトペの役割を考えていく。

3 『浮雲』周辺のオノマトペ

3・1 調査資料と比較する語

調査対象としたのは、『浮雲』同様言文一致体の作品として①『薄命のすず子』(嵯峨の屋おむろ・明治21年)②『露子姫』(石橋忍月・22年)③『白玉蘭』(山田美妙・24年)④『小公子』(若松賤子・25年)、言文一致文が実践される以前のもので、漢文脈

を基調とする⑤『花柳春話』（織田純一郎・11年）⑥『竜動鬼談』（井上勤・13年）⑦『情海波瀾』（戸田新堂・13年）⑧『経国美談』（矢野龍溪・17年）、和漢混交文の⑨『西の洋血潮の暴風』（櫻田百衛・15年）、和文脈を基調とする⑩『高橋阿伝夜叉譚』（仮名垣魯文・12年）⑪『蝶鳥紫山裾模様』（高島藍泉・16・17年）⑫『勤王佐幕 巷説二葉松』（宇田川文海・17年）である。前章で見た心情を表す漢語系オノマトペを中心に、これらの作品に多く現れるものを選び出して対照したのが表2である。

表2・1は、主として仮名を振らずに使われるもののうち、三作品以上に見られたもの、表2・2は、対応する和語系オノマトペがあるものである。（表の最初の欄は『浮雲』の用例数である。）

3・2 言文一致文と明治十年代の作品に見るオノマトペ

表2・1は、漢文脈・和文脈・言文一致文を問わず多用された漢語系オノマトペである。（表2・1以外で、二つの作品に見られたものに「怏々・慨然・欣然・嚮々・寂然・爛々・寥々・凜烈」がある。）これらの多くは心理描写に結び付く語であり、2章で見たように、和語系オノマトペの不足している部分を補っていると考えてよいのではないだろうか。明治十年代の旧態依然とした文章だけでなく、初期の言文一致文にも見られることがそれを物語っているのではないか。言文一致文だけで見ると、『浮雲』で使われる割合が高いのは、二葉亭において、その意識が特に強かったためであろう。例えば表2・2の「悄然・悄然」、「默然」^⑬「慄然」^⑭は、他の言文一致文等では和語系オノマトペの仮名表記だけで使われている。二葉亭が、仮名表記だけにせず、わざわざ漢語系の語を宛てて使ったことに、用語を厳密に使うとう意識の高さと、表現しようとする意味を漢語系で補おうとした、漢語への信頼感

がうかがわれる。漢語系によって和語系の意味を細かく使い分けるようなことは、他の作品にも見られる。例えば、『浮雲』で「こり・にこにこ」を漢語系オノマトペで使い分けているが、資料⑤・⑦でも「微笑・靨然・輒然」といったいくつかの漢語系と対応させている。心情描写ではないが、資料⑫では「ひらり」という和語系を「颺乎・颺然・飄然・閃然」の四通りに表現し分けている。ただ、一方で、「悄然」に対して「すく／＼しよんぼり・ひつそり」、「茫然」に対して「ぼんやり・うつかり」を対応させるように漢語にも意味の広がりのあるものがあり、和語系と組み合わせることで相互に意味を補い得たのではないだろうか。

また、言文一致作品（資料①・④）では、和語系オノマトペに漢語系を宛てるものは少数である。A（仮名表記の和語系）とB1a（漢語系を宛てるもの）の異なり語数だけ示すと、①はAが48、B1aが6、②はAが54、B1aが2、③はAが133、B1aが7、④はAが123、B1aが6となっており、『浮雲』に比べてかなり少なく、和語系と漢語系とはつきり使い分けていたと考えられる。漢語系オノマトペの割合自体は『浮雲』と比べて極端に低いわけではなく、異なり語数だけ示すと、①は和語系54、漢語系16（29・6％）、②は和語系60、漢語系16（26・7％）、③は和語系148、漢語系40（27・0％）、④は和語系132、漢語系29（22・0％）となっている。心情を表す語を中心に、漢語系オノマトペで表すのが適切である意味領域の語があったのだろう。その点で、目を向けたのが資料④である。資料④の『小公子』は児童向けの翻訳文で、オノマトペの多用も文体特徴の一つと言われている^⑮。和語系のもの（通常意味するオノマトペ）が多く使われている。表2・2に見るように、「びつくり」は従来伝統的に「吃驚」など漢字を宛てて使われてきたが、④ではすべて仮名書きにするなど、

仮名表記の意識も高かったと思われる。その『小公子』でいくつかの漢語系オノマトペを使っていることには、意味があるのではないだろうか。『小公子』では、仮名書きの漢語系オノマトペが二例見られる。「ユウ／＼と・いんぎんに」である。どちらも漢字表記でも使っているのだが、特に「ユウ／＼と」は、他の和語系オノマトペの大部分がそうであるように片仮名書きになっており、漢語系というより、和語系としての意識の方が強いのではないかとも思われるのである。『浮雲』にも一例、「リウとして」という片仮名書きの漢語系オノマトペが見られたが、『浮雲』だけでなく、『小公子』においても、漢語系オノマトペの中でも使いやすいものを、俗語と同じように言文一致の文章に取り入れていこうとしたのではないかと思われる。この点について考えるために、江戸時代後期の作品のオノマトペを簡単に参照したい。

3・3 江戸時代四作品に見る漢語系オノマトペ

江戸時代後期の作品で、現実の会話を活写して言文一致体にながっていくと見られる洒落本・滑稽本・人情本のうち『通言総籙』『浮世風呂』『東海道中膝栗毛』『春色梅児誉美』の四作品のオノマトペを調査した。これらの作品には多くの和語系オノマトペが見られるが、その中に混ざって漢語系オノマトペが少数ではあるが見られた。作品ごとに挙げていく。「」は会話文中に見られるもので、数字は用例数を示す。

『通言総籙』 しん／＼と・まん／＼と

『浮世風呂』 欣々然と・「べん／＼と」・「べん／＼と」2

『膝栗毛』 巍々と／たる2・しん／＼と・そう／＼と・

ばうぜんと・彭々たる・漫々と・黙然と・

ゆう／＼と4・ゆふ／＼と2

『春色梅児誉美』 そう／＼

ほとんどが疊語形式の語で、和語系オノマトペの型に当てはまりやすいことも関係しているのか、多くが仮名表記で、「夜はしん／＼とふけわたる(総籙)」「ゆう／＼とこしうちかけて(膝栗毛)」「夜中までべん／＼と飲居らアな」(浮世風呂)のように、和語系オノマトペであるかのような使われ方をしている。「彭々たる」以外は、明治前期の資料のいくつかに見られたものである。すでに江戸時代後期から、これらの漢語系オノマトペは身近に用いられてきたようである。「しん／＼と・べん／＼と・まん／＼と・ゆう／＼と」は四作品の中では比較的使用例が多く、一般的に使われていた頻度が高いと思われる。「ばうぜんと・黙然と」は、表2-1で見たように明治前期で多く用いられる語だが、これらも早くから定着していたことが分かる。漢語としての抵抗感もなく広く用いられていると、その漢語の意味に当たる和語系オノマトペは発達しにくくなることが考えられる。例えば明治前期には、「茫然と」に「ぼんやりと」「うっかりと」の和語系オノマトペが対応しているが、思いがけないことに驚きを感じ気抜ける意味が、和語系のものでうまく表されているかどうか、疑問が残る。「ばうつと」のような語はまだ使われておらず、和語系オノマトペが全体的に未発達であることも、漢語系オノマトペに頼る原因になっているようである。

ま と め

以上、まず『浮雲』の和語系・漢語系オノマトペの調査から、和語系オノマトペだけでは表現し得ない部分を漢語系オノマトペ

で補ったこと、『浮雲』の場合、その多くは心理描写につながる語であること、二葉亭が言文一致の新しい文章に、漢語の中でも使いやすい漢語系オノマトベを積極的に取り入れようとしたことを推察した。そして、そのことが『浮雲』特有ではないことを見るために、周辺の言文一致文体の作品、明治十年代の和文脈・漢文訓読文脈を基調とするいくつかの作品を概観して、漢語への信頼度の違いは多少あるが、『浮雲』で見た和語系・漢語系オノマトベの関係が、他の作品にも認められることを確認した。

漢語系オノマトベは、型の広がりや種類の面で和語系オノマトベが発達するまでの間、それに替わるものとして広く用いられていたようである。そのいくつかは、すでに江戸時代の洒落本・滑稽本・人情本の作品にも見られ、和語と大差なく用いられるものもあり、漢語系オノマトベの使用意識を考える上では興味深い。早くから定着した漢語系オノマトベの多くは、疊語形式など従来の和語系オノマトベの型に当てはまるもので、和語系のもので差別化することなく用いられることで、漢字による意味規定の意識は薄れ、音によるイメージが定着していった、すなわち、音象徴語として扱われたのではないだろうか。

漢語系オノマトベは、和語系オノマトベの発達にも大きく関わっており、和語系オノマトベを考える際には無視できない語群である。具体的に見ても、心情表現のみならず「峨々と森々と・濛々と」といった自然描写など、古くから漢語系オノマトベに頼っていた意味分野では、和語系オノマトベの発達が遅れ、漢語系オノマトベが多く使用されたことが推測される。

従来、オノマトベ研究では、和語系オノマトベのみが対象とされたが、漢語系のものとの関連を考え合わせていく意義は大きい。時代を追って両者を対照させることで、和語系オノマトベの発達

の様相が、より鮮やかに見えてくるのではないだろうか。

注

1 本稿では「オノマトベ」を擬声語・擬態語の総称の意味で用いる。

2 古いものでは頼惟勤（一九六四）・鈴木修二（一九七七）など中国語・漢文研究者の立場からの漢語系オノマトベの紹介、金田一春彦（一九七八）の漢語系オノマトベの分類がある。また、明治期の作品に見る擬音語・擬態語の研究を通して、玉村文郎（一九七三）、半沢幹一（一九八八）、木村義之（一九九四）の一部で触れられている。

3 一般語彙とは、オノマトベに対して象徴性を持たない非オノマトベを指す。

4 鈴木修次（一九七七）等、他の漢語系オノマトベの解説と分類は同じである。

5 一般語彙の漢語と紛らわしいので、事物の状態を形容する語であり、日本語の文脈の中で副詞・形容動詞となり得るものを拾った。また、分類（3）の場合、「自然」「当然」「公然」に関しては状態を表す意識が低いと見做し、取らなかった。

6 『浮雲』は、一・二編を『新編浮雲』（複製・近代文学館）、三編を明治二四年金港堂より出版された単行本（国会図書館蔵マイクロフィルム）に拠った。『白玉蘭』は明治二四年青木萬山堂より出版された単行本（国会図書館蔵マイクロフィルム）に、『小公子』は初出の『女學雑誌』に拠った。他の作品は『明治文學全集』（筑摩書房）に拠り、振り仮名のない部分は『明治文學全集』が定本としているものを国会図書館蔵のマイクロフィルムなどに当たって確認した。

7 玉村文郎（一九七三）で、以下のように分類している。

- 「借義用法」 焦燥(あたふた) など
「借音用法」 岸破(がば) など
「借訓用法」 苛々(いら／＼) など
「借音借義用法」 發揮(はつきり) など
「借訓借義用法」 悶々(もだ／＼) など
8 「浮浮」という漢語があるが、「気のさかんに立ちのぼるさま」などの意味で「うきうき」とは意味が異なるため、「浮く」という和語の訓読みとその意味を借りたものと考ええる。
9 玉村文郎(一九七三)では、「和語疊語に漢字疊語があてられていると言える」という表現が見られ、杉本つとむ(一九九三)の巻末「△あて字▽概説」では「ルビが主、真字・文字が従なのである」と書かれている。
10 オノマトペの認定には諸説あるが、ここでは、和語系のものでは慣用化している「ちよつと」、語基を重ねた一般語彙と考えられる「しみじみ・つくづく・ほのぼの」等を取らない。また、「こたつく」など派生語は取らないが「しっかり者」など名詞を修飾しているものは数に含めた。漢語系のものでは「自然・当然」など、事物の様相を表している意識が薄れていると考えられるもの、感動詞ではあるが嘆息の「ああ」とは異なり用法が固定している「嗚呼」、「率爾ながら」のように慣用表現で使われるものは取らなかった。
11 半沢幹一(一九八八)
12 「日本文章の将来」(「くち葉集ひとかごめ」)の中に「漢字にて書かんよりは假名文字またハ羅馬字などと簡易なる方法によりて書かんこそよかめれ」という一節がある。
13 前掲論文
14 この語は漢語系オノマトペとして扱い、表では便宜上Cの項に入れた。
15 島田太郎氏は「原文にはない擬音語・擬態語を巧妙に補って

描写に生彩を与えている。」(若松賤子訳『小公子』の成立)『近代日本の翻訳文化』亀井俊介編・一九九四・中央公論社と述べている。

16 日本古典文学大系(岩波書店)に拠った。

参 考 文 献

- 太田絃子(一九九四)『「浮雲」の擬声語の漢字表記』 就実語文(就実女子大学) 一五
木村義之(一九九四)『近代のあて字と文学』 『日本語学』一三一四
金田一春彦(一九七八)『擬音語・擬態語概説』『擬音語・擬態語辞典』(浅野鶴子編) 角川書店
杉本つとむ(一九九二)『△宛字△の論』『文字史の構想』第七章 萱原書房
(一九九三)『当て字用例辞典』雄山閣書房
鈴木修次(一九七七)『擬態語の中の漢語』 『みずす』一九一八
一
頼惟勤(一九六四)『漢語のオノマトペア』 『言語生活』一五〇
宮田裕之・岩崎節子(一九七八)『近世象徴詞考』『東洋大学短大紀要』9
玉村文郎(一九七三)『漢字をあてる―「多情多恨」表記考―』大阪外国語大学学報
(一九八八)『尾崎紅葉・幸田露伴の漢字―「多情多恨」と「五重塔」―』『漢字講座9 近代文学と漢字』明治書院
半沢幹一(一九八八)『二葉亭四迷の漢字―「浮雲」における字法―』『漢字講座9 近代文学と漢字』明治書院

A Study of Onomatopoeia in the First Half Meiji Era

—— Focusing on the Expressions in “UKIGUMO” ——

Michiko NAKAZATO*

ABSTRACT

This paper attempts to discuss how onomatopoeias of Japanese origin are related with those of Chinese origin in the first half Meiji era. In this study five stories including “UKIGUMO” written in the styles of unificated spoken and written language were investigated as well as other eight stories which were published before “UKIGUMO” and written in another older language style. The results showed three points as follows ;

- (1) Compared to onomatopoeias of Japanese origin, those of Chinese origin can express some expressions, particularly concerning emotion, because those of Japanese origin lack their variations in such areas.
- (2) Because of such features mentioned above, the writers preferred to use onomatopoeias of Chinese origin rather than those of Japanese origin , until they came to possess sufficient kinds and variations.
- (3) In addition, the writers who promoted the unification of spoken and written language tended to use easily adoptable onomatopoeias of Chinese origin as well as the Japanese colloquial words.

* Division of Languages: Department of Japanese Languages